

すくすく子育てチャイルドケア

## 誤飲

動物の赤ちゃんは、生まれたときから自分で生きるための行動を取っています。馬やライオンの赤ちゃんは空腹になると、自分からお母さんの乳首を求めて飲みます。ところが、人の赤ちゃんは泣くだけです。自分からお母さんの乳を飲むことができません。

お母さんが赤ちゃんを抱っこして乳首を口に含ませてあげると、そこで初めて飲みます。

赤ちゃんは、口に触れたものは吸うことができるのです。だから自分の指が触れても吸うので、これがやがて習慣になって、「指しゃぶり」となります。

その赤ちゃんも、半年ごろになるとはいはいが始まり、1歳ごろには2本足で立って歩くようになるまで、行動は自由になります。そうなる



今度はいろいろなものが目に入るの、何か面白そうなものがあると、手で持って口に投入したりするようになります。

口に入れたものは反射的に飲み込んでしまうことがあるので、時にそれが喉に詰まると、窒息してしまうことがあります。

そこで0歳〜1歳ころまでは、運動発達とともに赤ちゃんの行動から目を離すことができません。赤ちゃんの目に付くような色・形・大きさのもの、赤ちゃんの遊びの範囲や手の届くような場所に置かないようにします。

赤ちゃんは危ないことを知らないままに、ただ行動あるのみです。誤飲を予防するには、赤ちゃんの手の届く場所に危ないものを置かないことです。とても単純なことなのです。

参考までに、日本の0歳児の死亡原因は、生まれつきの病気や感染症などありますが、これらは医学の進歩で減少してきています。しかし相変わらずなのが「不慮の事故死」で、なかでも窒息がトップ。2011年は99人でした。赤ちゃんにとって、遊びと誤飲は、紙一重なのです。

健康百科

## インフルエンザ治療薬と副作用

インフルエンザが風邪と違うところは、感染すると高熱（38度以上）、頭痛、関節痛、筋肉痛、倦怠（けんたい）感など、全身症状が中心であることです。

医療機関では、インフルエンザが疑われると、診察に加えて「迅速診断検査キット」を使った検査で、インフルエンザウイルスの有無や、ウイルスの型を調べ、短時間で診断することができます。

治療は、ウイルスの増殖を抑える「抗インフルエンザウイルス薬」による治療が中心です。処方される薬には、内服薬のタミフル、吸入薬のリレンザとイナビル、点滴静注薬のラピアクタの4種類があります（いずれも商品名）。ただし、発病から48時間を過ぎると、体内のインフルエンザウイルスが増え過ぎて、薬の効果は期待できなくなるので、症状が強い場合は、早めに受診することが大切です。

治療薬の副作用としては、注射部位が腫れたり、かゆみが出たり、嘔吐（おうと）、下痢などの胃腸症状や発熱、

倦怠感、頭痛などが出る場合があります。

重篤なものでは、ショック、血圧低下、呼吸困難、肝機能障害などが報告されていますが、頻度はそう多いものではありません。

以前、治療薬タミフル服用後の小児の異常行動（転落事故）が報告されましたが、これが薬のせいなのか、インフルエンザ自体の副作用なのかは、まだ結論が出ていません。しかし、最悪のことを考え、現在は小児にはタミフルは使用しないことになっています。

大人の場合もそうですが、特に子どもの場合は、服用後2日間は注意・観察を怠らないようにすることを心掛けてください。

